

また、竹内家は、単に卓絶した技術をもった医家のみではなかった。代々の当主が文化に関心を寄せて、当代一流の文人、画人が留春園を訪ねている。伊藤東涯に師事して儒学を学んだ三代新八持堅は、字は其則、号を淇園といい、文芸に最も心を寄せた人物であった。

竹内家の菩提寺地蔵寺には「病人様のお墓」(有縁無縁供養塔)が建てられていた。これは、眼療のため全国から諏訪の地へあつまつて来た患者(時には、付添人)の中、不幸この地で病没した人たちの墓所であった。主人竹内新八の心のやさしさがしのばれる。

(福島 義一)  
〔ある企画〕一九九〇年、A四判、四七〇頁、非売品〕

Edited by Y. Kawakita, Shizu Sakai and Y. Otsuka

**History of Hygiene—Proceedings of 12th International Symposium on the Comparative History of Medicine—East and West**

現代の視点から医学史を学ぼうとする時、そこにいくつもの落とし穴のあることに注意しなければならない。その一つは、現在何の疑いもなく広く使われている医学専門用語が、実は時代の流れの中で大きくその意味を変えている場合である。このシンポジウムの主題である Hygiene も、きわにその一例である。

日本では普通 Hygiene を衛生、Public Health を公衆衛生と訳しているが、内容的にみて二つの日本語の間にはほとんど区別がないので、この二つを同義語と割り切っても大きな誤りにはならない。そして、このような見解をとるには根拠がある。

一八六五年、ミュンヘン大学でベッテンコッフが世界で最初の衛生学教授となった時にはこの Hygiene が教室名に使われた。したがって、この時初めてこれが医学用語として登録されたことになる。

その後しばらくして日本では長与専斎が「衛生」という医学用語をつくったが、いつとはなしに Hygiene を衛生と訳するようになった。この意味で使われる Hygiene を「衛生学」と呼ぶことにしよう。

ところが、Hygiene という言葉はギリシヤ女神の Hygieia から生まれた言葉であつて、ベッテンコッフの専売ではない。これは一般語であつて、前近代の医学とか、民族医学とか、伝統医学などの意味も持っている。これを前者と区別するために、ここでは「養生論」と呼ぶことにしよう。このシンポジウムに参加した人たちがどちらの意味に解釈したかによって大きく二群に分類される。本書には十人の分担執筆者がいるが、Hygiene を学術用語すなわち「衛生学」と解した人は四人で、国籍別にみると日本三人、米国人一人である。言うまでもなく、いずれも近代史を論じている。一方、これを一般語すなわち「養生論」とみた人は六人で、国籍別にみると日本人二人、米国人一人、英国人一人、中国人一人、韓国人一人で、その論文の内容はいずれも中世史な

いし古代史である。

この結果、Hygiene の歴史には十九世紀に断層のあることが明らかとなる。この二つの Hygiene を比較してみると、「衛生学」は近代医学の一分野であって、内容の構成は全世界を通じて単一であるのに対して、「養生論」の方は、文化により、時代により内容的にまちまちである。

今回のシンポジウムでは、東洋と西洋の「養生論」についての地理的比較とともに「養生論」と「衛生学」との間の時代的な比較考察が行われていて興味深い。本書の特徴はここにあると言つてよい。

しかしながら私は、差異を見出すよりも時代と文化を越えた共通点をその中に発見することの方が、Hygiene の歴史を学ぶ上でもっと大切ではないかと思う。例えば西洋におけるルネッサンス期から近代へにかけての Hygiene の流れをみると、その大きなうねりの底流には連続する何ものかの存在がうかがわれる。さらに、明らかに不連続と見える西洋と東洋との間にも、やはり共通するものがあると私には思える。

「衛生学」は近年急速に進歩した伝染病学と環境衛生学によって特徴づけられている。すなわち、流行病と公害という二大健康障害と闘って勝利した「衛生学」というのが一般の理解である。しかしながら、これらはいかに輝いて見えても、その一部分にか過ぎない。今後の「衛生学」に課せられている問題は、老化、遺伝、精神障害などの内因性健康障害であるが、これまでの「衛生学」はこれらに対してほとんど対策が樹てられなかった。

したがって、今後の「衛生学」の進むべき方向は、一度「養生論」に復帰し、そこから新しい装いをもって再出発することだと思ふ。その意味で本書は Hygiene の将来に対して大きな示唆を与えていると言えよう。

(山本 俊一)

[Ishiyaku Euro America, Inc. Publishers, 一九九一年、

B 五版、二六九頁]

△第三七卷第四号・六一七頁正誤▽

一三行 (誤) 「終身学の部長」 (正) 「終身の学部長」